

**発行者**

北海道へき地・複式教育研究連盟
<http://dohekifuku.zenhekiren.net/index.html>

委員長 道 下 誠
編集責任者 長 澤 啓 二
印刷所 山東印刷株式会社
夕張郡栗山町中央2丁目245 TEL 0123-72-1151
題字 書家 濱谷 彩鶴 (はまや さいかく) 氏

感謝と今後への期待 ～ へき地・複式教育の新たな展望 ～

北海道へき地・複式教育研究連盟委員長 **道 下 誠**



「北の大河の源流 上川の地で育つ子らに 未来を切り拓き 夢を実現する力を」を大会スローガンとして、第74回全道へき地複式教育研究大会上川大会ファイナルステージが、9月17日、18日の2日間、旭川大雪クリスタルホール、そして上川管内6校を会場として開催されました。前回の胆振大会から始まった、2年連続同一会場校で全道大会を実施するという新たな開催方式により、前年度の成果と課題を受けての授業改善等が進むとともに、私たちが目指している子どもの変容がよりわかる大会となりました。

6つの分科会会場校では、これからのへき地・複式教育の可能性を広げていくような、多岐にわたる授業が展開されました。まず、「学習リーダーを中心とした複式授業」では、子どもたちの主体性と協働性が育まれ、両学年共に学びの深まりが見られました。また、「ICTを効果的に活用した授業」では、個別最適な学びと協働的な学びの融合が見事に図られ、子どもたちの学習意欲と理解力が大きく向上しました。さらに、ICTの利活用により、地理的・人的制約を乗り越えた新たな学びの場が創出され、市町村の枠を超えた教育連携の可能性も広がってきています。そして、「義務教育学校ならではの、学校種を超えた5学年合同の授業」では、前期課程と後期課程の

児童生徒の異学年交流を通じて、互いに学び合い、支え合う姿が印象的でした。

これらの授業実践は、へき地・複式教育の未来を切り拓く貴重な成果であり、今後の教育の在り方に大きな示唆を与えるものです。これまでの継続的な研究と実践の積み重ねは、地域と共にある学校教育の活性化と、子どもたちの可能性を広げる大きな一歩となりました。そして何より、へき地・複式教育における新たな展望が開かれたと思います。一般的に、へき地・複式校の子どもたちは大規模校の子どもたちに比べると、「競争心が少なく、コミュニケーション力や社会性が低いのではないか。」と言われていますが、今大会の子どもたちの姿を見ていると、間違いなくこれらの課題にしっかりと向き合うことができたと言えます。今後は、こうした実践を深化・継続させていくことで、へき地で学ぶ子どもたち一人一人が、より豊かで多様な学びを享受できる環境を整えていかなければならないと思っています。

結びになりますが、本大会開催にあたり、ご指導とご支援をいただきました北海道教育委員会、北海道教育庁上川教育局・空知教育局、上川管内市町村教育委員会、教育関係諸団体のみなさまに感謝申し上げます。そして何よりも、上川大会を成功に導いていただいた実行委員のみなさま、会場校の先生方や児童・保護者のみなさま、大会に参加して下さった多くの方々に心からお礼を申し上げます。本当にありがとうございます。

第74回全道へき地複式教育研究大会 上川大会ファイナルステージを終えて



北海道教育庁上川教育局
局長 今村 隆之

第74回全道へき地複式教育研究大会 上川大会ファイナルステージが、オンライン参加を含む多くの先生方の御参加により盛大に開催されましたことに、心からお祝いを申し上げます。

さて、本年9月25日に、中央教育審議会教育課程企画特別部会において、次期学習指導要領の改訂に向けた「論点整理」が公表され、①「主体的・対話的で深い学び」の実装、②多様性の包摂、③実現可能性の確保という改訂議論を貫く三つの方向性や、「自らの人生を舵取りする力と民主的な社会の創り手育成」等の観点が示されました。今後は、各教科等のワーキンググループ等において、「深い学び」の具現化に向けた内容等について検討が進められることとなります。

このように今まさに、今後の学びの在り方に関する議論が進んでいる中、各学校においては、こうした動きも注視しながら、児童生徒の実態等を踏まえ、エビデンスに基づく教育課程及び授業の検証改善を確実に進め、教育の質の向上を図ることが重要であります。

とりわけ、へき地校や複式学級においては、これまで積み上げてこられた子どもの主体性を生かした実践と、ツールとしてのICTを効果的に活用し、これらのベストミックスにより、主体的・対話的で深い学びを実現していく必要があります。

このような中、本研究大会が、「主体的・協働的に学び、ふるさとへの誇りと愛着をもった人間性豊かな子どもの育成」を研究主題とし、昨年度のファーストステージの成果や課題を踏まえた授業が管内6会場で公開され、子どもたち一人一人が自ら進んで学びを進めていくための工夫やデジタル学習基盤の活用等により、「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業のポイントを参加者全員で共有するなど、多くの成果を挙げられました。

皆様方におかれましては、本研究大会で得られた成果を各地域や各学校におけるへき地・複式教育の一層の充実に向けた取組に積極的に活用されますとともに、全道各地域において広く発信していただきますことを御期待申し上げます。

結びに、北海道へき地・複式教育研究連盟のますますの御発展と、会員の皆様方の更なる御活躍を祈念申し上げ、お祝いの言葉といたします。



第74回
全道へき地複式教育研究大会
上川大会
実行委員長 山田 顕次
(音威子府村立音威子府小中学校)

第74回全道へき地複式教育研究大会 上川大会ファイナルステージが、9月17・18日の2日間にわたって開催できましたことに心より感謝申し上げます。

本年度は、道へき・複連第Ⅱ期第10次長期5か年研究推進計画の2年次として、その研究主題である「主体的・協働的に学び、ふるさとへの誇りと愛着をもった人間性豊かな子どもの育成」に基づいて研究を進めてまいりました。この研究成果を広く発信するために、上川大会のスローガンを「北の大河の源流 上川の地で育つ子らに 未来を切り拓き 夢を実現する力を」と掲げ開催いたしました。

私たちは、令和6年度のファーストステージに始まり、今年度のファイナルステージを終えるまでの2年間、準備期間を含めればさらに前から準備委員会・実行委員会を組織し、上川のへき地・複式教育に携わる会員の力を結集し、大会運営を円滑に行うため準備を進めてまいりました。

児童数・生徒数の減少による統廃合等の事情は上川管内も例外ではありません。加盟校や会員数が減少することに不安は募りましたが、進んで運営に携わってくださる会員諸氏の皆様、積極的に優れた授業実践を公開してくださる会場校の皆様、また、物心両面でご支援・ご協力をくださった道へき・複連の役員の皆様、管内外の関係機関の皆様のご尽力のもと、この2年間の大会を無事成し遂げることができました。心よりお礼申し上げます。

道へき・複連の皆様にはこれまでの確かな蓄積を糧として、上川大会開催までつないでいただきました。大会は終了しましたが、本大会の成果と課題について丁寧に総括し、来年度の石狩大会へと引き継ぐことが今の私たちの責務であると感じております。

結びになりますが、ご参加いただいた方々とはもとより、本大会の開催にご尽力いただきました連盟の会員の皆様をはじめ、北海道教育委員会、北海道教育庁上川教育局・空知教育局、上川管内教育委員会連合会、上川管内各市町村教育委員会、北海道教育大学、北海道小学校長会、北海道中学校長会、上川管内教育研究会等、管内外の関係機関の皆様に、厚く感謝とお礼を申し上げます。

基 調 報 告

第74回全道へき地複式教育研究大会



上川大会ファイナルステージ
実行委員会研究部長

長井 香征

【上川へき・複連の歩み】

上川管内におけるへき地・複式教育の研究は、昭和23年、北海道へき地・複式教育研究連盟の結成とともに始まり、以来70年以上にわたり、「上川の地に育つ子どもたちが、未来を切り拓き、夢を実現する力」を育むことを目指し、教育実践を積み重ねてきた。昭和59年「第33回全道大会」、平成9年「第46回全道大会」、平成22年「全道プレ大会」、翌年の『第60回全国大会北海道大会』を上川管内7市町村9会場で開催するなど、研究大会を通じて教師の英知を結集し、組織的・計画的な実践研究と事業推進を行ってきた。

近年、少子化の影響により児童生徒数の減少や学校の統廃合が進み、加盟校も減少傾向にある。今年度も閉校予定の学校があり、今後もこの流れは続く見通しである。たとえ子どもが一人でも、へき地校の教師は、へき地三特性を前向きに捉え、「少人数だからこそできる教育」「へき地だからこそできる教育」を推進し、地域や保護者の信頼に応えていく責務を担っている。複式校の増加が予想される中、本連盟は、複式授業の研修機会を担う重要な役割を果たすべく、ICT活用や遠隔授業の展開など、時代の変化に即した教育の充実に向けて、実態と課題に根ざした研究を進めていく。

【上川へき・複連の研究推進計画】

本連盟の研究は、これまで、北海道へき地・複式教育研究連盟の研究推進計画に沿って、歩調を合わせながら進めてきた。現在の第Ⅱ期第10次長期5か年研究推進計画においても、同連盟と連携しながら、これまでの研究・実践の成果と課題を踏まえ、学校や地域の特性を生かした魅力ある教育活動の推進に取り組んでいる。研究の基本構想としては、研究推進計画との関連を踏まえ、2分野6課題による課題別研究方式を継承しながら、研究の推進に努めている。また、課題の解明に向けた実践的研究を基盤とし、「長期・課題別・共同研究方式」を継承していく。へき地三特性を前向きに生かした特色ある教育活動の推進をはじめ、「生きる力」の育成、「知識・技能」の習得と

「思考力・判断力・表現力」の育成のバランス、そして「豊かな心」と「健やかな体」の育成を柱とした、へき地・複式教育の充実を図っている。

【上川大会ファーストステージの成果と課題】

令和6年9月18・19日の2日間、上川大会ファーストステージをハイブリッド形式で開催し、延べ500名以上が参加した。分科会では公開授業や研究協議を通じて、各会場校の研究に対して多くの助言を得ることができ、加盟校にとっても授業力向上の有意義な機会となった。成果として、子どものつまずきへの支援、ICT活用、主体的・対話的な学びの定着、学習リーダーの育成が挙げられる。一方で、主体的な学びの深化やICT格差の解消、話し合い活動の質の向上などの課題も明らかとなった。ファイナルステージでは、成果と課題の両面を踏まえ、子どもが自ら学び、深く考え、仲間とともに成長する学びの姿を追求していく。

【上川大会ファイナルステージに向けた研究推進】 ＜大会研究主題＞

「主体的・協働的に学び、ふるさとへの誇りと
愛着をもった人間性豊かな子どもの育成」
～児童生徒一人一人が他者とつながり、
地域とともに「生きる力」を伸ばす学校・
学級経営と学習指導の深化・充実をめざして～

＜大会スローガン＞

「北の大河の源流 上川の地で育つ子らに
未来を切り拓き 夢を実現する力を」
本大会では、全へき連及び道へき・複連の研究主題を踏まえ、上川地区の教育実践を基盤に全道の研究成果を交流・共有していく。現在は5か年計画の2年次にあたり、2分野6課題に沿って各校が着実に実践を進めている。研究分野1では地域の特色を生かした教育活動と学校経営の充実、研究分野2では個別最適な学びの実現に向けた指導方法やICT活用に取り組んでいる。これまでの実践を継承しつつ、分科会では会場校と協力校が連携し、へき地・複式教育の魅力をさらに高めることを目指している。

【結びに】

本研究大会に多大なるご支援、ご助言をいただいた北海道教育委員会など、関係各位に心より感謝の意を表し、本大会の基調報告とする。

分 散 会

【分散会Ⅰ報告 学校・学級経営】

■提言主題（第3課題）

「ふるさとを愛し、伝統と文化を大切にしながら、多様な考えを認め合い、自ら学びをつくる子の育成」

提言者 えりも町立えりも岬小学校
教諭 粕谷 知希

■提言概要

本校では、総合的な学習の時間の充実を通して、地域を愛し、目標に向かって自ら学びを深める子どもの育成を目指している。

仮説Ⅰでは、郷土芸能「少年神楽」に取り組み、神社見学や練習、地域行事での発表を通して、ふるさとへの愛着や自己肯定感を育んだ。一方で、活動内容の固定化によるマンネリ化が課題として挙げられた。

仮説Ⅱでは、自然や漁業、水産資源など地域の教育資源を活用した体験型学習を行い、ポスターセッション形式の発表を通して、児童は課題を自分事として捉え、多様な視点で物事を考える力を育んだ。内容の偏りが課題として残った。また、放課後学習や家庭学習強化週間では、全職員が連携し、児童一人一人に応じた丁寧な支援を行っている。こうした積み重ねが、学びへの意欲や自己肯定感の向上につながっている。

■研究協議

<討議の柱>

「伝統と文化を継承し、地域と連携しながら豊かな心を育む教育活動の創造と推進」

- ・ 伝統文化の継承と創造の両立には、教育目標との関係を明確にし、カリキュラムを体系的に整理することが必要である。神楽の例では、継承すべき部分と子どもが創造できる余地を分けて考える工夫が有効である。
- ・ ICTを活用し、他地域との比較を通じて固定概念を打破することで、オリジナルな創造につながる可能性がある。
- ・ 地域性を生かした実践として、防災教室や酪農・漁業体験、合同運動会などが挙げられ、特色のない地域でも自然を基盤にした活動が展開されている。
- ・ 地域人材の活用では、専門家による指導や警察・消防との連携による防犯・防災教育が効果的であり、外部との交流が新たな創造を生む契機となっている。
- ・ 地域への愛着と貢献意欲を育むことが重要であり、子どもが地域の価値に気付き、将来地域に還元したいという思いをもてるような学びが求められる。
- ・ 若手教職員の育成においては、実体験を通してへき地教育の魅力を伝えることで、マイナスイメージを払拭し、意欲的な人材育成につなげていく必要がある。

■助言者より

- ・ 教育課程の編成では、学習指導要領に基づく資質・能力の育成と、地域ならではの学びの両立が重視される。総合的な学習の時間を軸に、探求的な学びを

通して課題を見付けて解決していく力を育て、教科横断的なカリキュラムへとつなげていきたい。

- ・ 地域資源を活用し、発達段階に応じた系統的な学びを第1学年から第6学年まで積み上げる工夫がされていた。今後、カリキュラムを見直す際には、地域・学校・保護者の願いを踏まえ、幼児教育から高校までをつなぐ一貫性を視点にもつことも重要である。
- ・ 学校運営協議会などの連携の場では、「育てたい子ども像」の共有が求められる。この目標が教育課程に明確に位置付けられることで、教育活動が具体的に展開され、評価されていく。特に、へき地では、地域性や小規模性の特性を生かした教育活動を展開していきたい。
- ・ 教育活動に外部の力を取り入れることで社会に開かれた教育課程の実現し、今求められている資質・能力を子どもたちに身に付けさせることを目指していきたい。

【分散会Ⅱ報告 学習指導①】

■研究主題（第5課題）

「様々な人々とのふれあいから学び、
自分の世界を広げる」
～児童生徒の主体性・コミュニケーション力の
向上を目指して～

提言者 千歳市立駒里小中学校 教諭 岡上 泰子

■提言概要

本校は小規模校で、多様な価値観に触れる機会が少ないため、「様々な人々とのふれあいから学び、自分の世界を広げる」という研究テーマを掲げ、子どもたちの主体性とコミュニケーション力の育成を目指している。

主体的な学びの育成では、「VACUサイクル」を軸に、課題設定や対話的な学びの工夫を重ねてきた。今年度は「主体的に考え行動できる子の育成」をテーマに、理論研修や授業研究を通じて実践を深めている。中学校ではICTを活用し、生徒が自ら学習計画を立てる取組も進んでいる。

コミュニケーション力の育成では、小中合同の活動や市内中規模校との交流、ICTを活用した遠隔交流などを通じて、多様な他者との関わりを経験している。生徒会・児童会が中心となり、主体的に関わる姿が見られている。

地域や海外とのつながりでは、自然や産業体験、英語を使った国際交流などを実施。こうした取組を通じて、子どもたちは自らの世界を広げ、目指す子ども像に近づく学びを積み重ねている。

■研究協議

<討議の柱>

- 「主体性やコミュニケーション力を育てる学習環境や指導方法の改善と充実」
- ・ 主体性については、「主体性」と「主体的」の違いを明確にし、学校全体で共通認識をもつことが重要であ

る。その上で、子どもが学びに向かう動機づけにつながるよう、学校として意図的な仕掛けが必要である。

- ・コミュニケーションの力を育むには、外部との連携を通じて相手との関わりを意識させることが大切である。将来、様々な場面で活躍できる人材育成につながるよう、必要性をもたせた取組が求められている。
- ・小規模校ならではの人間関係の近さから、伝えなくても伝わる環境がある一方で、継続的なコミュニケーションや課題設定の難しさが課題となっている。語彙力や表現力の育成も含め、研修の充実が必要である。
- ・アウトプットの場面を意図的に設定し、話し合いの型を活用することで効果的な対話を促すことができる。自信をもたせる工夫や小中連携の取組を広げることで、より力を伸ばすことができるのではないかな。

■助言者より

- ・研究協議では、学校や指導法ではなく「子どもの姿」を基盤に議論が進められていた点が印象的だった。子どもがどのように学んでいるかを丁寧に観察し、そこから取組を設計する姿勢が、持続可能な学びにつながっていた。
- ・主体的な学びの育成は、8年間にわたる継続的な実践の積み重ねによって築かれてきた。課題提示から振り返りまでの流れが定着し、自己決定の場を取り入れた授業や家庭学習が展開されている。今後は、課題を創出する力の育成が重要となる。
- ・他者との関わりを通じたコミュニケーション力の育成では、学年を超えた交流やICTを活用した取組が進められていた。「ゴロゴロひろば」などの実践により、閉じた関係性から広がりを生み出し、授業や教師研修にもつながる可能性が示されていた。
- ・今後の期待として、「問いを創り出す力」と「学びの成果と課題の可視化」が挙げられる。クラウドの活用などを通じて、子ども自身が学びの質や成長を自覚し、地域や世界とつながる力を育てていくことが期待される。

【分散会Ⅲ報告 学習指導②】

■研究主題（第6課題）

「自分の考えをもち、表現し合える子どもの育成」
～学習場面に応じてICTを効果的に活用することで、
主体的に学び、自分の考えを表現できる
授業システムの確立～

提言者 中札内村立上札内小学校 校長 菅原 晴彦

■提言概要

十勝管内では、へき地・複式教育研究大会や課題別実践交流研修会、教師力向上ワークショップなどを通じて、教育課題の共有と実践の工夫が継続されている。また、北海道教育大学との連携により、授業公開や児童理解交流を通じて、授業力の向上にも取り組んでいる。

本校では、山村留学制度や緑の少年団活動、愛鳥モデル校活動など、地域と連携した特色ある教育活動を展開している。子どもたちは自然体験や地域交流を通じて、人とのつながりや地域への思いを育みながら、

学びの質を高めている。特に緑の少年団活動では、「学ぶ・守る・愉しむ」の3つのテーマのもと、バードウオッチングや植樹、カヌー体験など多様な体験活動を行い、自然の大切さや地域を思う心を育てている。さらに、総合的な学習の時間や異校種間連携も取り入れ、教育活動の充実を図っている。また、ICTは、子どもたちが自分の考えをもち、表現し合える学びを支える重要なツールとして活用している。個別最適な学びと協働的な学びを行き来する手段としても位置付け、授業のシステム化や学習スタイルの統一にもつなげている。

■研究協議

＜討議の柱＞

「地域資源やICT機器の効果的な活用による学習過程の改善と教育活動の充実」

- ・地域資源の活用では、高齢化による学習機会の減少への不安が示され、CSの活用や外部機関との連携による活性化が求められる。酪農や海など地域の資源を活かした学びは、人との関わりによって支えられており、地域の力で子どもたちが育てられている。山村留学では、外国籍児童への対応が新たな課題となっている。
- ・教育課程では、小規模校から大規模校への移行に際し、児童が安心して参加できるようアイスブレイクや行事の段階的連携が有効とされた。他校との交流には準備の負担が課題であり、工夫が求められている。
- ・ICT活用では、アナログとデジタルの融合による協働的な学びを進めることが大切である。ロイロノートや動画の撮影、生成AIの活用など、効果的な活用方法があり、学習方法の選択肢が広がる一方で、書く力の低下や端末の違いによる戸惑いも課題として挙げられた。
- ・全体協議では、山村留学や小規模校の学習スタイルに関する質問が出され、ICTを活用した協働的な学びの具体例が共有された。

■助言者より

- ・小規模校といっても地域の実態は多様であり、産業や住民構成、移住者、外国籍児童の増加など、学校ごとに特色がある。街の戦略と連動しながら、それぞれの学校が工夫して取り組んでいる。少人数ならではの丁寧な指導は可能だが、資質・能力の育成に向けて、個に応じた指導の充実が求められている。
- ・教育課程の編成では、幼児教育のように環境を通した学びの視点を取り入れ、意図的・計画的に学びを仕組むことが重要である。育成を目指す資質・能力を明確にし、学校や児童の実態に応じた教育プログラムを構築し、実施・評価・改善のサイクルを大切にすることが必要である。次期学習指導要領に向けて、柔軟な編成への準備も進めていく。
- ・ICTの利活用では、端末だけでなくクラウドやネットワークを含めたデジタル学習基盤の整備が進んでいる。探究的な活動と組み合わせることで、情報活用力や学びの質の向上が期待される。子どもに必要な資質・能力を見極め、それに応じた教育課程と環境整備を行うことが重要である。

各分科会報告

〈第1分科会 士別市立上士別小学校〉

1 研究主題

「自ら課題を見つけ 共に学び 高め合う子の育成」 ～児童が主役となる授業づくり～

2 研究内容

- (1)主体的に学習に取り組むための授業づくり
 - ・個別最適な学びの適切な場面設定と手立て
 - ・対話的・協働的な学びの工夫
- (2)学習内容の定着

3 研究の成果

研究内容 1

- ・同時間接指導を中心とした学習展開により、児童は課題の解決に向けて意欲的に取り組むことができた。また、つまずきや戸惑いを見せる児童にも、適切な指導を行うことができた。
- ・様々なICT機器やアプリを効果的に活用することにより、児童は、自分に合った課題の解決への方法を見付けることができたり、自分なりの考えをまとめていくことができたりしていた。
- ・ICTの活用は、少人数であることから他者の意見を広く共有するよりも、「一緒に解決に向けて取り組む場面」で特に効果が見られた。

研究内容 2

- ・児童が自己の学習を振り返る観点をもつことができ、次時以降の学習で、課題意識を高めたり、追究の方法を工夫したりする姿が見られた。

4 今後の課題

研究内容 1

- ・同時間接指導を中心とした学習展開にするためには、日常的な学習の充実が不可欠であり、児童が自分たちで学習を進める力をさらに育成する必要がある。
- ・ICT機器やアプリを活用するためには、その取扱いや操作方法をしっかりと身に付けさせる必要がある。
- ・少人数学級においては、考え方や意見の幅が限定されがちであり、児童の考えを広げる工夫が求められる。

研究内容 2

- ・提示した評価規準に基づく振り返りが十分にできていない場合がある。日常的に適切な自己評価の仕方について指導を続ける必要がある。



〈第2分科会 幌加内町立幌加内小学校〉

1 研究主題

「豊かな関わりを通して、自己の生き方を考える子の育成」
～道徳科の授業改善を通して～

2 研究内容（2年計画 網掛けは1年目の重点）

- (1)豊かな関わり
 - ①ICTの効果的な活用
 - ②遠隔合同授業の効果的な活用
- (2)生き方を考える
 - ①ポートフォリオの活用の工夫
 - ②導入と振り返りの工夫
 - ③発問の精選、問い返し工夫

3 研究の成果

研究内容 1

①「ICTの効果的な活用」

導入での事前アンケート結果を短時間で振り返ったり、展開後半で再度アンケートに戻り、自分事として考えさせたりするなど、意図を明確にしたICTの活用ができた。また、ICTを活用して意見を可視化することにより、協働的な学びへとつなげることができた。

②「遠隔合同授業の効果的な活用」

昨年度に引き続き石狩市立厚田学園と遠隔合同授業を行った。集団が小さい僻地校においても多様な考えに触れることができ、両校にとって効果的であった。また、他校とつながることで、児童に意欲や集中力が生まれた。

また、今回の遠隔合同授業を通して、道徳の授業だけでなく、他の教科や活動にもつなげることができるなど、可能性を広げる実践となった。

研究内容 2

①「ポートフォリオの活用の工夫」

今年度は、昨年度のポートフォリオも蓄積できているため、定期的に同じ分類の内容項目の学習を振り返る時間をつくり、児童自身が自分の変容に気付ける場となった。

②導入の振り返りと工夫

導入で提示したアンケート結果を、展開後半でも活用したことにより、自分事に移行しやすい学習活動となった。

③発問の精選、問い返し工夫

発問を精選して必要最小限に減らし、ねらいとする道徳的価値に迫るための主発問を十分に吟味していくことが重要であると考え、児童の実態も考慮した上で主発問を設定したり、「人間理解」「他者理解」「価値理解」のどこを中心発問とし、どの順番で問うのか、内容項目や教材の特徴、児童の実態などに合わせて構成を整理することにより、児童の成長につながった。

4 今後の課題

2年間の研究大会から、参加いただいた皆様からのご助言や他校教員との意見交流により、他教科へと広がりをもたせ教育的効果を上げるための遠隔合同授業の展開、主体的な学びへとつなげる間接指導の工夫など、新たな気付きが生まれた。これまで積み重ねてきた日々の実践を大切にしながら、さらに本校の教育目標「強い子 学ぶ子 明るい子」の育成を目指し、今後も子どもたちに寄り添い進んでいきたい。



〈第3分科会 東川町立東川第二小学校〉

1 研究主題

「主体的に学び 自分の思いや考えを
伝え合う子どもの育成」

～子どもが生き生きと学ぶ学習指導をめざして～

2 研究内容

- (1)主体的・協働的な学びを支える授業づくり
- (2)間接指導につながる直接指導の工夫
- (3)自ら学ぶ間接指導の工夫

3 研究の成果

研究内容 1

- ・授業の計画・実施にあたっては、町へき・複連加盟校の先生方と教材研究や授業構想を共同で進めることで、多様な視点から授業を見つめ直すことができ、授業改善の視点を広げるとともに、より効果的な授業づくりにつなげることができた。
- ・ICTを活用した学習では、友達と自分の考えを比較しやすくなったり、分からないときにヒントを得たりすることができ、子ども同士が学び合い、考えを深め合う姿が多く見られるようになった。こうした実践を通して、ICT活用が主体的・対話的で深い学びを促す上で有効であることを確認できた。

研究内容 2

- ・既習事項を想起させるなど、子どもが思考を継続できるような学習の流れや声掛けを工夫したことで、子どもの思考の流れが途切れることなく、学びを深める姿が見られた。
- ・子どもの実態に応じた環境づくりを工夫したことにより、子どもたちは安心して学習に集中することができた。

研究内容 3

- ・間接指導の場面で、子ども同士が相談したり、自ら課題を解決したりする姿が見られ、学びの選択を通して、より主体的に学ぶ姿へとつながった。
- ・既習事項を確認できる手立てを工夫したことで、間接指導の場面においても、子どもが自ら学習を進めることができ、学びのつながりを生むことができた。

4 今後の課題

- ・子どもに委ねる時間を確保することを意識して授業づくりを進めてきたが、教師主導で学習を進める場面とのバランスを今後も検討していく必要がある。1単位時間だけでなく、単元全体を見通した計画を構築していくことが課題である。
- ・間接指導につながる直接指導では、子どもが本時の目標を明確に把握できるよう、課題設定の工夫を図ることが求められる。
- ・複式授業においては、学習目標の達成状況をどの場面で把握するかをあらかじめ計画し、評価していく必要がある。
- ・デジタルとアナログを両立させ、学習のねらいを達成する上でどちらの活用がより効果的であるかを教師が的確に見極めた上で、学年の発達段階に応じた系統的な指導計画を作成していく必要がある。



〈第4分科会 美瑛町立美馬牛小学校〉

1 研究主題

「自ら学び、進んで表現し共に高め合う子の育成」
～学ぶ楽しさがわかり、学ぶ楽しさを実感できる算数科の授業づくりを通して～

2 研究内容（3年計画3年次）

- (1)学ぶ意欲を高める工夫
 - ①児童の実態把握
 - ②指導内容・指導計画の工夫

- ・課題の吟味（3観点のどの観点かを明確に）
- ・問題提示の方法
- ・見通す力（見積もる力）の育成
- ③基礎・基本の定着

(2)表現力を高める工夫

- ①板書の工夫
- ②ノート指導の工夫
- ③発問・指示の工夫
- ④ICT等教材・教具の工夫

(3)考えを広げ、深める工夫

(今年度の重点)

- ①対話での練り合いを取り入れた学習展開の工夫
- ②振り返りの工夫



3 研究の成果

研究内容 1

- ・児童の発達段階に応じて、学習リーダー中心に授業を進めることができた。教師の「待つ」姿勢や「同時間接」の指導形態も、児童主体で進める学習において効果的だった。
- ・実物やICTによる提示、生活に密着した問題など問題提示の工夫により、知的好奇心や見通す力が高まった。
- ・算数の見方・考え方などの算数用語をパネルにし、活用することで、児童が共通の土俵で主体的に学習を進めることにつながった。

研究内容 2

- ・児童の思考やつぶやきを起点とし、より考えを活性化させるための「問い返し発問」により、児童の思考が広がる場面が見られた。
- ・「わかりやすさ」を意識した、ICT教材やホワイトボード、具体物などの活用が効果的だった。
- ・友達の考えを自由に見られる場の設定（白紙共有）を行うことで、友達の考えをヒントにしながら、自分なりの考えをもったり考えに自信をもったりすることができた。

研究内容 3

- ・算数用語をおさえられていることで、考えが焦点化され、お互いに理解しやすく、話し合いがスムーズになった。
- ・多様な考えを引き出すための新たな視点の提示により、考えを深めることができた。
- ・児童のつぶやきの多さが、考えの練り合いや、

お互いの考えの深化につながっていた。

- ・スプレッドシートによる振り返りで、自他の学びの蓄積と、学びの変容を感じることができている。

4 今後の課題

- ・児童主体で進める学習の中で、本時の目標とつながらないような課題やまとめをしたり、答えが収束しなかったりする場合に、教師がどう軌道修正していくか。
- ・ループリックを活用した学習の明確化（解決すべき課題、到達目標、振り返りなど）
- ・学習内容を定着させる習熟時間の確保
- ・少人数指導における多面的に考える方策のより一層の工夫（遠隔におけるClassroomの活用、スタディログ、生成AIの活用など）

〈第5分科会 富良野市立樹海学校〉

1 研究主題（3年次研究3年目）

「自分の考えを表現し、
共に深め合い高め合う児童生徒の育成」
～主体的な学びを目指した指導の工夫を通して～

2 研究内容

- (1)各教科の特質に応じた『見方・考え方』を働かせる指導の工夫
- (2)知識を活用・発揮する場面の設定

3 研究の成果

研究内容 1

- 「各教科の特質に応じた『見方・考え方』を働かせる指導の工夫」
- ・算数科では、分数や図形の意味に迫る活動を通して、学習リーダーを中心に子どもたちが既習事項を活用しながら課題解決に取り組む姿が見られた。
- ・体育科では、キャッチバレーなどの柔軟な工夫により、子どもたちが「どうすれば落とさないか」について考える場面が生まれ、技能習得と思考の両立が図られた。

研究内容 2

- 「知識を活用・発揮する場面の設定」
- ・算数科では、異分母の通分や複合図形の面積など、既習知識を活用する場面が明確に設定されていた。
- ・ICTの効果的な活用により、図や説明の共有が促進され、思考の可視化と他者の考えとの比較が可能となった。



- ・体育科では、異学年交流を通じて、上級生が下級生に教える場面が設定され、知識の活用・発揮とともに小中連携が図られていた。

4 今後の課題

- (1)異学年複式指導においても、知識を活用・発揮する場面を確実に設定し、時間配分を工夫しながら、十分な時間を確保していくことが必要である。
- (2)見方・考え方を働かせる工夫として、既習事項等の確実な理解・定着が重要である。
- (3)複式授業では、学年ごとの指導事項・評価規準の違いにより、観察や評価が難しくなる場面がある。見取りをしやすくする単元構成等の工夫が必要である。



〈第6分科会 南富良野町立南富良野小学校〉

1 研究主題

主体的に学び続け、協働しながら自己の学びを深める子どもの育成
～深い学びにつながる学習過程の

工夫を通して～

2 研究内容

(1)教材及び単元の工夫

①学習過程の工夫

- ・見通し（問い）の工夫
- ・自己決定、自己選択の場面の設定

②児童の実態と教材の特性を配慮した手立ての工夫

- ・具体物半具体物などの手立ての工夫
- ・補助教材等の工夫
- ・ICTの効果的活用

(2)話し合い活動の工夫

①話し合う目的や内容の明確化

- ・必要感をもたせる学習環境の設定
- ・「話し合いわざ」の活用

②学習形態の工夫

- ・ペア、グループなどの小集団をつくっての交流活動

(3)評価の工夫

①指導と評価の一体化

- ・個に応じた指導の充実
- ・振り返りの充実

3 研究の成果

研究内容1

- ・見通しを丁寧に行っており、児童に安心感を与えていてよかった。
- ・ICTを使用することで、他者参照が可能となった。
- ・他者と交流できるアプリを使用したことがよかった。学びの蓄積にもなる。次の時間などにも動画として共有できるのがよい。

研究内容2

- ・話し合いの素地ができていた。今までの蓄積の成果だといえる。今後は、話し合いの型に頼り切らない方法も検討していく。
- ・話し合いカードを使った話し合い活動がよかった。活発な話し合いになる。低位の子の救い上げにもなった。

研究内容3

- ・振り返りの視点を提示することで、振り返りの内容を充実させることができた。
- ・ピクトグラムで振り返りの視点を提示していたのが、分かりやすくよかった。

4 今後の課題

- ・問いや見通しで、児童の興味・関心、活動への意欲をもたせるような工夫が必要である。
- ・具体物を用いる場合、児童の思考を促す効果的な提示や操作方法を工夫する必要がある。
- ・ICTの活用については、単元計画でより効果的に活用できる場面や方法を検討していく。
- ・振り返りの仕方について、学習内容の理解や学び方、他者との関わりなど、効果的な振り返りの観点を校内で検討し共有する必要がある。
- ・今まで行ってきた南富良野町学習過程スタンダードを今後どのように授業に位置付けるのか、学校としての授業づくりや授業形態について検討していく必要がある。



大会写真 第74回全道へき地複式教育研究大会上川大会ファイナルステージより



大会長挨拶



上川教育局長挨拶



基調報告



分散会Ⅰ



分散会Ⅱ



分散会Ⅲ

次期開催地から 第75回全道へき地複式教育研究大会石狩大会ファーストステージ 石狩の大地で皆様とともに学ぶ機会を楽しみにお待ちしております

第75回全道へき地複式教育研究大会石狩大会実行委員長 鳴海孝則

前年度の研究成果を引継ぎ、研究の更なる充実に努め、新たな広がり・深まりを目指した2年連続同一校公開授業、学校教育DX型研究大会として、第Ⅱ期第10次長期5か年研究推進計画の2年次にあたります上川大会ファイナルステージが成功のうちに幕を閉じたことに、心より敬意を表します。重ねて、大会実行委員の皆様、そして各学校教職員の皆様の万全なご準備と丁寧で心のこもった運営で、成果を共有させていただきましたことに、感謝申し上げます。

さて、上川大会での成果と課題を引き継ぐ第75回全道へき地複式教育研究大会石狩大会は、全体会と分散会を札幌市において、分科会を石狩管内3市3会場にて『石狩の大地に根ざし、未来を切り拓く力強い学びを』を大会スローガンに掲げて開催いたします。

今大会では、上川大会の未来志向と成果を継承し、さらなる未来への飛躍を目指すことが求められています。あわせてへき地・複式教育の原点である「地域に根ざした、開かれた学校教育」の意味をしっかりと心に刻み、第Ⅱ期10次長期計画にふさわしい継続的な共同研究の成果を実感できる実りのある大会になるよう努めてまいります。

北海道のへき地・複式教育の深化と飛躍に向け、実行委員共々、「心満ちる海と大地 石狩」にて、皆様のお出でをお待ちしております。

■石狩大会スローガン

「石狩の大地に根ざし、未来を切り拓く力強い学びを」

■開催期日

令和8年9月16日(水) 全体会・分散会
9月17日(木) 分科会

分科会	会場校	研究主題～副主題～	分野・課題・研究領域等
1	石狩市立 厚田学園	対話的に学び、自己の考えを広げ深める子の育成 ～ファシリテーション力を向上させる授業を通して～ (令和8年度改訂予定)	学校学級経営2 学習指導5 全教科 (令和8年度改訂予定)
2	江別市立 北光小学校	主体的に追究し、対話を深め、互いに高め合う児童の育成 ～国語科における読解力・コミュニケーション能力の向上を目指して～	学校学級経営3 学習指導6 国語科
3	千歳市立 東小学校	主体的に考え、協働して、粘り強く取り組む子どもの育成 ～国語科の「読むこと」領域を通して～	学校学級経営1 学習指導6 国語科